八田與一の墓前祭と馬総統

この5月8日、烏山頭ダム湖畔での八田與一（はったよいち）墓前祭は、馬英九総統の出席を得てこのほか盛大に挙行された。総統は八田與一技師の台湾への貢献に感謝し、技師一家の暮らしていた家屋を含む職員宿舎4棟の復元、2年後にこの地区一帯の八田技師の記念公園としての整備を明言した。その公園を石川県を中心とする台日交流の拠点とし、日本との交流促進を政治目標とすると高らかに宣言した。

さらに総統は、「本日、東京では八田技師のアニメ映画『バッテンライ!!』（八田来る）が映画館での上映が開始された。この映画が早く台湾で上映されることを望む」、と述べ、これを聞いて、筆者に同行していた、この映画を製作した虫プロ社長の伊藤叡氏も大変満足気であった。この墓前祭には八田技師出身の金沢市花園小学校生18人が、総統の前で八田技師の賛歌『フォルモサ、ダムの父』（注：フォルモサとは台湾島の別称、美しい島の意）を合唱、代表が日台交流が深まることを願い、千羽鶴やふるさとの風景を描いた絵が贈られた。

金沢からは毎年数十名が墓前祭に参加しているが、今年は花園小学生を含め約100名の参加があり、年々増加する傾向である。もちろん地元からは、嘉南農田水利会の方々を中心に毎年100人以上が参加しているが、今年は総統の参拝もあり、マスメディアを含めると数百人が参加した。

1942年5月8日、長崎県五島列島沖でアメリカの潜水艦グレナディア号の魚雷によって沈没した大洋丸に乗船していた八田與一は、船と運命を共にした。享年56歳であった。八田與一は陸軍省の命により、占領直後のフィリピンへ開発派遣要員として派遣され、他の多くの優秀な技術者とともに広島県宇品港から出発した。その死からすでに67年の歳月が流れ、もはや昔話に属する。にもかかわらず、台湾の人びとが、毎年この命日に集まって恩人八田與一の墓前祭を続けているのは、八田の建設した烏山頭ダムにより、15万haの荒地を沃野

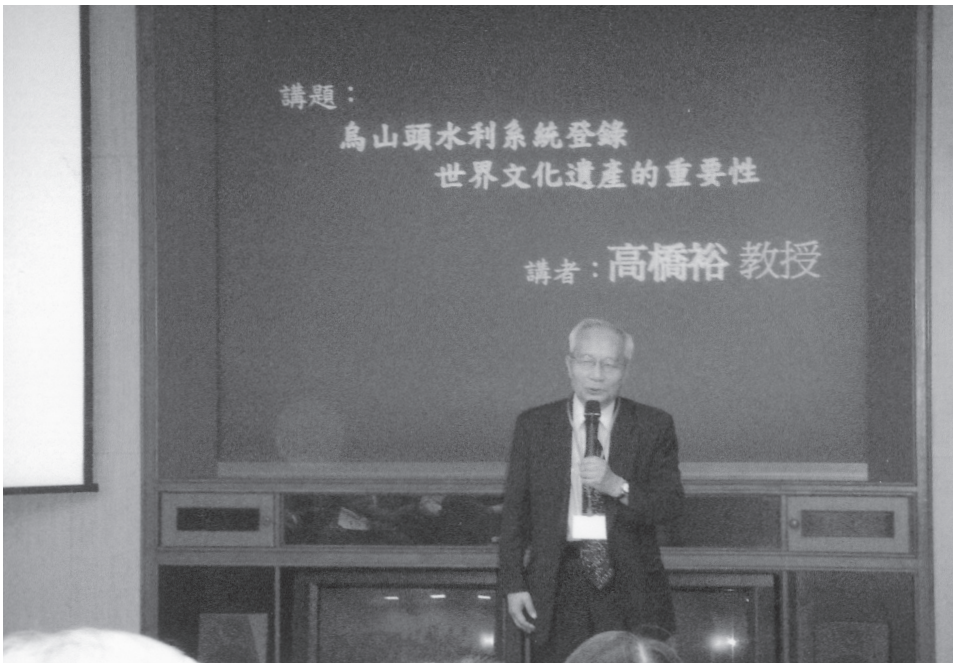

写真1　墓前祭直前に国立台南芸術大学で八田與一をテーマに講演（提供：中村文明氏）

に変えたことへの絶大な感謝には違いないが、同時に台湾の人びとの報恩の気持ちの深さに私は感動する。

八田與一がこのように深く敬愛されているのは、嘉南平原へ来て、ここの農民が洪水、渇水、塩害の三重苦に悩み、塗炭の苦しみに喘ぎきわめて貧しい暮らしであることを知って、何とかしてこの地域の人びとを救わなければならないと、そのために種々研究調査したあげく、烏山頭ダム（1930年完成、堤高56m、堤長1・3km、貯水量1・5億㎥、セミ・ハイドロリック工法によるアースフィルダム）を建設し、かんがい水路総延長約1万kmによって15万haへのかんがいに成功したからである。工事中は毎日のように湖畔にたたずみ、あるいはその銅像のように片膝を立て、髪をむしりながら思索にふけっていたという。

1910（明治43）年、東京帝大土木工学科を卒業するや否や台湾総督府土木部技手として台湾へ渡った八田は、その時点から台湾に骨を埋める覚悟で、台湾の庶民のために働いたのである。台湾の人びとは現場での彼の姿勢に、それを感じ取っていたからこそ、思慕の念を深めていたのである。当時東洋一の大規模ダムを、しかもアメリカに数例しかないセミ・ハイドロリック工法で完成させたこと自体、土木技術者として超一流である。しかし、八田の偉大さは、最初から具体的な目的をもって、すなわち貧困に苦しむ嘉南の人びとを救うためにダムを設計したからで、その技術者としての誠意と信念が、それによって恩恵を受ける人びとによく理解されたからである。その熱意が最初は工事に反対した人びとにもわかってもらえたのである。技術者の本懐というべきであろう。

外代樹（とよき）夫人は16歳で結婚して、初めて台湾に渡ったときから、夫の人生観を理解し同じく台湾に骨を埋める気持ちであった。しかし、夫が亡くなり、やがて1945年8月15日敗戦を迎え、日本人はすべて帰国せよとの命令が下った。烏山頭ダムが完成し夫とともに台北へ移ったが、やがて戦局不利となり台湾へのアメリカの空襲が始まったとき、外代樹は迷うことなく疎開先に烏山頭を選んだ。ここは夫が精魂込めて造り上げたダムがある。ここは結婚した土地であり、夫がこよなく愛した沃野と変えた思い出の土地であり、8人の子どもを育てた土地であった。台湾を愛し烏山頭が好きであった外代樹は、帰国命令に素直に従う気にはとうていなれなかった。敗戦から半月、9月1日未明、八田家の家紋入りの和服に身を包みそっと家を出て、夫の建設した烏山頭ダムの放水口の渦巻く流れに身を投げ、夫の後を追った。25年前のその日は、嘉南大圳起工日であった。

悲嘆に暮れた嘉南平原の人びとは、與一の銅像のかたわらに、八田夫妻の日本式の墓を設けその最後を懇（ねんご）ろに葬った。以来、このお墓と銅像のあるこの区域は、いわば聖地であり、嘉南の人びとの心の憩いの場であり、そして何よりも八田夫妻と会える心休まる土地となり、いまや日台親善の拠点となったのである。

前述の映画『バッテンライ!!』は昨秋完成し、まず金沢で試写会が、そして東京・新宿の明治安田生命ホールで11月20日に披露された。当日は八田與一と石川県同郷の森喜朗元総理もはせ参じられ挨拶をいただいた。金沢においては、北國新聞社は以前から郷土の偉人八田與一に関してはしばしば報道し、この映画製作時から全面的に協力したことも、県民への広報に著しく貢献している。今回の墓前祭にも北國新聞社から3名派遣されており、5月9日から連載記事を含め4日間にわたって墓前祭とその背景を掲載している。

同アニメ映画は金沢のコロナ映画館では昨年末から4週間で約1万人の観客を集

写真2　墓前祭の合間に花園小児童と交流する馬英九総統（提供：北國新聞社、撮影：宮本南吉氏）

写真3　八田與一の人柄を偲ばせる座像（提供：中村文明氏）

めた。金沢市立ふるさと偉人館には金沢が生んだ8人がその関係資料とともに陳列されている。八田與一は、水沢観測所長時代にZ項の存在を発見した木村栄、禅の研究の鈴木大拙、高ジアスターゼ創業の高峰譲吉、建築家谷口吉郎らとともに、ふるさとの偉人としてこの偉人館に名を連ねている。すでに金沢での八田の知名度は高かったこともあり、映画への関心も高く、この映画は前述の金沢市立花園小学校など多くの小学校でも上映された。東京では馬総統も紹介したように、5月8日から「シネマート新宿」で、大阪は「テアトル梅田」（5月23日より）、名古屋は「名演小劇場」（7月4日より）で、上映予定である。

八田を土木界を中心にひろく知られるようにしたのは、古川勝三著『台湾を愛した日本人』によるところが大きい。1989年、松山の青葉図書から発行された同著は翌1990年土木学会著作賞（現出版文化賞）を授与された。しかし、残念なことに同出版社の廃業により絶版になっていた。八田の知名度が高まるにつれ、同書復刊への要望は高まっていた。古川さんはさらに調査を深めて加筆し、松山の創風社から『台湾を愛した日本人』改訂版として4月末に出版にこぎつけた。古川さんは1980年から3年間、当時の文部省海外派遣教員として台湾の高雄日本人学校に勤め、そこで初めて現地の人びとの尊敬の的となっていた八田與一の話を聞き、これは多くの日本人にそれを知らせねばならないとの使命感に燃えた。その調査記録を高雄日本人会の機関誌へ連載し、それを1983年に台湾で発行した。そのニュースは1983年5月7日の朝日新聞に紹介され話題となった。帰国した古川さんは前述のように1989年、同著を出版したのである。同著は2001年、台湾語訳が陳栄周氏により台湾で出版されている。1997年には司馬遼太郎著『台湾紀行』（『街道を行く』シリーズ）において八田與一が詳しく紹介され、土木界以外の多くの日本人に知られるようになった。さらに2005年には『民衆のために生きた土木技術者たち』のハイビジョンビデオ（大成建設企画、高橋裕監修、田部純正監督）が日映企画によって制作され、青山士、宮本武之輔とともに、八田與一の評伝として公開された。私はこのビデオ上映とともに講演行脚に全国約60会場を訪ねた（土木学会誌92巻9号、2007年9月号、CEリポート〝映画『民衆のために生きた土木技術者たち』を携えて全国を回る〟参照）。

八田の先輩である浜野弥四郎（1869～1932年）は1896年帝大卒業後すぐにお雇い技師バルトンとともに台湾に渡り、水道がまったく整備されていなかった台湾で、幾多の辛苦を経て活躍した（稲場紀久雄著『都市の医師―浜野弥四郎の軌跡―』、1993年、水道産業新聞社参照）。浜野の銅像も近く復元されると聞いている。

八田與一は以前から、特に台湾中南部での知名度は高かったが、馬総統による墓前祭参加は台湾各新聞のトップを飾り、台湾でのその知名度は台湾全土に拡がっている。馬総統は昨年の命日にも、正式就任以前に墓前祭に参加していた。烏山頭周辺は野党民進党の地盤で総統はここでの人気を高めようとの政治的思惑もあるともいわれているが、国民党主席が日本統治時代の日本人の功績を讃えた意義は大きい。

ところで、日本では金沢での知名度は北國新聞の努力もあってかなり高い。しかし、石川県以外では決して高くはない。『パッテンライ!!』の3大都市での上映に期待をかけたい。インフラ整備に一生を捧げた技術者はどの都道府県にもいるが、公共事業への批判の強い昨今、マスメディアもなかなか積極的に取り上げようとしない。今回の馬総統の墓前祭参加や会場での台日親交への熱意ある発言についても、北國新聞以外はほとんど取り上げていないのは解せない。

より基本的には現在、日本の義務教育、社会教育においてインフラの史的重要性、それに貢献した人びとへの評価努力が欠如しているように思える。台湾では八田與一は義務教育教科書にも取り上げられている。石川県では副読本で取り上げ始めている。大学では理工系、特に土木の人気が下降している。われわれの現代のそのような社会的風潮に流されることなく、ようやく高まってきた八田ブームの経験を生かし、土木技術の正当な役割、土木技術者の重大な使命に目覚め世に周知する努力に励むべきである。

（高橋裕（国際連合大学上席学術顧問　東京大学名誉教授））

写真4　八田夫妻を顕彰するパネル（提供：中村文明氏）